
炉心融解

亜倉 暮亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炉心融解

【Nコード】

N6633W

【作者名】

亜倉 暮亜

【あらすじ】

某ボーカロイドの『炉心融解』をもとに、学園もののヘタリアで小説を書いてみた。ほとんど勢いです。

サイトにて同作品を發表しています。名前は違いますが私です。

はじめに

この小説は、某ボーカロイドの『炉心融解』を上手く歌えない作者がヤケを起こして書いた小説です。半分嘘です。本当はマイブーム・絶賛炉心融解という中での単なる思い付きです。

そしてヘタリアのキャラクターで物語は進みます。というのもマイブーム・絶賛ヘタリアという中での単なる思い（以下ry

内容はもちろん、炉心融解の歌詞がもととなっていますが、作者は炉心融解の動画を見たことがあります。曲と歌詞のみ知っている状態です。なのに書きました。

というのも、あえて動画の先入観無しで書いてみたい、といった果敢もとい無謀な考えがあったからです。まあそういう考えもやっぱり単な（以下ry

* 以下注意 *

- ・ 学園パロ。
- ・ 病んでいます。
- ・ キャラ崩壊してるかも。
- ・ くどい。かも。（色んな意味で）
- ・ 歌詞拾ってるだけ。
- ・ 歌の世界観生かせてない
- ・ ぶつちやけ俺得。

* 人物紹介 *

一応日本にある普通の学校という設定で、国名でも人名でも（たくさん外人がいる学校は普通じゃない）そのままとおかしいので、名前を勝手に創作しました。

（とりあえず国名と人名を組み合わせて当て字とか色々）

・ ニチモト 日本 キク 菊

言わずもがな、日本です。そのまま『ニホン』と読むよりも苗字っぽいと思ったため『ニチモト』。彼は人名でも普通ですが、他は国名も混ざっているのにそれでは、却っておかしいかなあという微妙な配慮でこうなりました。

ちなみに主人公です。なぜならマイブーム・絶賛日本という（以下try

あと小説には出ないので余談ですが、同じ要領で中国は『ナカグニ』と読みたいですね。

・ キリス 桐須 アメリ 天吏

アメリカです。カタカナの名前は漢字の見た目が苗字っぽくなるように意識しました。見た目が既に苗字っぽいので、読みはあえてそのままです。

人名の『アルフレッド』を覚える前に名前を作ってしまったて、国名しかありません。しかし私の中でこの名前が定着してしまったのでもうこのままです。

・ キリス 桐須 アサヤ 朝也

イギリスです。アメリカの兄という設定。

アメリカの姓が『桐須』なのはこの兄弟設定に由来します。

これまた余談ですが、天吏の双子の兄設定にしたいカナダは漢表記の加奈陀の『加奈』そのままがいいと思ってます。

以上を踏まえた上で、大丈夫な方はどうぞ。

焼却炉にゴミを投げ入れるのが好き。だから、掃除の最後、投げ入れる人を決めるじゃんけんが始まる前に、私はひっそりと手を挙げる。「私がやります」。「いえ、ひとりで行きますので、皆さん帰っていただいて結構ですよ」。そしてひとりで持つには多すぎるゴミ袋を、えっちらおっちら運ぶ。

今。

燃えている焼却炉へ。ゴミを投げ入れる瞬間、赤い炎、わずかに覗く青い炎に見入るのだ。

ある日の、掃除が終わった後、いつもどおりに手を挙げた時だった。

「私が…」

「今日はオレが行くんだぞ！」

言葉が遮られた。遮った張本人である彼は、最近仲良くなったクラスメート―桐須天吏だった。

そう言って私を振り向いた彼は、歯を見せて爽やかににかつと笑った。冗談じゃない。

「いつも菊にばかりさせて悪いじゃないか」

「…そんな気を遣っていただかなくても結構です」

「菊こそ気にしないでいいんだぞ。もちろん助けはいらないんだぞ！」

オレはヒーローだからな！と彼は背を向けた。なぜそこでヒーローを主張するのは分からない。ただ、私がいつも大変な思いをしながら運ぶゴミ袋を、何でもないように持ち上げて出て行った彼はあるいはヒーローの要素をいくつかは満たしているのかもしれない。ゴミを焼却炉に持って行くのは、二週間に一回。全てのクラス分を、焼却炉に一番近いクラスが持って行く。

…また、二週間待てば良いだけのことだ。そう考えて私は、学校を後にした。

1 (後書き)

ゴミ捨て係のクラスの決まり方が理不尽すぎますが、スルーの方
向で…。

桐須天吏は良く言えば人懐っこい、悪く、というより正直に言えば鬱陶しい。

不登校で引きこもっていた私を、生徒会の役目として彼は、無理矢理登校させた。

「今日から君と、学校に行くんだぞ!」。ノックもせずに入ってきた天吏。「オレは桐須天吏!天吏って呼ぶんだぞ!あとヒーローなんだぞ!」。握手。「握手したから、今日からオレの友達なんだぞ!」。安易な友達発言。なるほど、こういう人間が『世界中のみんな友達』とか言うのだな。ふざけやがって。顔も知らない友達なんて、友達なものか。

つまり第一印象は最悪だった。何か苦手なのだ。ああいう、過干渉で馴れ馴れしいのは。

結局クラスで孤立した私に、連れ出した責任感からか、やけに構ってくる。

「菊はハンバーガーは好きかい?」

「…普通、ですね」

「オレは好きなんだぞ!じゃあ、ハンバーガーの中で、何なら好きだい?オレは全部好きなんだぞ」

「全部普通です」

ふっん、そうかい。つまらなそうに言う彼。

「菊！今日放課後付き合ってくれよ！見せたいものがあるんだぞ！」

「えっと、今日は予定があるので…」

「え、じゃあ明日は？」

「明日もちよっと…」

「じゃあいつなら大丈夫だい？」

「それは分からないですね…」

彼は気付くことができたのだろうか？暗に私が行きたくないことを示していたことに。

「うわー！朝也が怒るんだぞ！ヘルプ菊！」

「なぜですか」

「寝ている隙に眉毛を二本抜いたから…いや、四色ボールペンのインクを差し替えたからかも…」とにかく怒ってくるんだぞ！」

そうじゃない。なぜ。なぜ私あなたが助けなければならぬのか。そう言ったのだ。

そんな風に、天吏はいつも私に構おうとする。そんな彼に私が向けている感情に、気付くこともなく。

もう随分、眠った夜を過ごしていない。

午前二時。不登校を止め、一人暮らしを始めたため、今このアパートの一室には、私しかない。いつものようにベランダを開けると、ガラス戸のサッシを境とした向こう側に、ひんやりした空気が

あることが分かった。少しだけ指を外に手を出すと、指先だけ冷たくなる。

徐々に。

私の部屋と外の空気が溶け合って、境目が曖昧になっていく。

窓の向こうには、深夜にもかかわらず華やかな街が眺められる。

しかし、闇に騒々しく浮かび上がるネオンは、やっぱりあの、焼却炉の炎とは違った。

ふと思い付いて私は、タンスを探って目的の物を見つけ、窓際に戻ってきた。かちゃんと、その持ってきた物――ライターを着火する。揺らめく赤い炎がそこにあった。

「所詮気休め、ですね」

そう呟いて、小さな炎をぼんやりと眺め続けた。

ようやく二週間が経った。私は思っていた以上にあの行為を楽しみにしていたらしい。しかし掃除の後、嬉々として手を挙げようとした私より前に、素早く手を挙げる者がいた。―天吏だ。

「今日もオレが行くんぞぞ！」

「…ちよつと、天吏さ…」

「いいんだぞ菊。菊はいつも忙しそうだし、持つて行くのも大変なんじゃないかい？」

とんだ勘違いだ。いつも忙しいと言って彼の誘いを断っているのは確かだが、それは断るための方便でしかない。そして持つて行くのも大変ではあるが、それだって焼却炉を見るためならばたいしたことではない。

天吏は私の苛立ちに気付きもせずにゴミ袋を持つて行ってしまふ。それを見て帰ろうと出て行くクラスメートを避けながら、私は天吏を追いかけて、彼の隣に並んだ。そして彼の左手に持たれていたゴミ袋を少々強引に奪い取った。

「手伝います」

「oh!びつくりしたんだぞ!別にいいのに」

「私は良くないのです」

二週間我慢したのだ。この二週間、自分でも意外なほど、私はあの炎を楽しみにしていたということが、嫌と言うほど分かった。それなのに、もう黙ってはいられない。苛立ちが足に表れたのか、かんと私のローファーが大きな音をたてた。と、それに被せるように。

「…えっへへ」

隣の天吏が突然、気の抜けた笑い声をあげた。

「…?…何かおかしいですか」

「いや。オレはおかしいんじゃない、嬉しいんだぞ」

「…何がですか」 聞き返したものの、答えの見当はついていない。
「『友達』」。

「菊がオレのために、こうして手伝ってくれてることがさ！」
誰がお前のために。

そんな言葉は、飲み込んだ。嫌悪感を感じるとはいえ、せつかくできた交友関係を、くだらないことで壊したくはない。

―飲み込んだ言葉は腹に、溜まる。

「…なあ、菊」

束の間の沈黙の後、天吏はそつと口を開いた。まるで彼らしくないその控え目な話し方に、私は違和感を感じて天吏の顔を見た。

「菊は、オレのこと、嫌いなんじゃないかって」

「思ってたんだ」「だって」

「今まで、菊は、オレが行かなきゃ、絶対に」

隣に居てくれなかっただろう？と、彼は、途切れ途切れに、そのつど私を窺うように言う。

「でも」

「今こうして」

菊が自分からオレと並んで歩いてる。それが、

「嬉しいんだぞ」

嬉しいんだぞ。二度目の、嬉しいんだぞ。オレが君に優しくして、君がそれに応えてくれたのが嬉しいんだぞ。君がオレに優しくしてくれたのが嬉しいんだぞ。…ってか？

―この、偽善者。

「…へ？」

「あなたのためじゃない」「あなたの隣に居たい訳じゃない」「あなたが好きな訳がない」

飲み込んでしまおうと。

腹に溜めてしまおうと。

思っていたのに。交友関係を、壊したくはなかったのに。

私の口からは、全部漏れ出していた。

「私は、嬉しくないです」

啞然としている天吏に、私は言葉を続けた。

「あなたはなぜ私に構うのですか」

「そんなの…友達だからに決まってるんだぞ」

「私はあなたと友達になった覚えはありません」

「何言ってるんだい。第一最初に友達って…」

「おっしゃいましたね、あなたは確かに。しかし私はさあ今から友達だと言った人間を友達だとは思いません。それはただの他人です」
「でも」

「違いますか。たった数秒前まで赤の他人だった人間がどうして友達と言えますか。あなたはその人の何を知っているのですか。今から友達だと言ったところで、正味概念としての友達になるのはもつとずつと先のことでありませんか」

「…だったら、オレと菊が知り合ったのは、結構前じゃないか。だから」

「時間は経ちました。でも私はあなたを友達とは思えません」

「！どうしてだい…」

「ライターのオイルが切れました」

私の、話の急な転換に、天吏は戸惑った顔をする。

「ライター…？」

「私はね、天吏さん。焼却炉の炎を見るのが好きなのです」

「焼却炉の…」

「そんなものが好きなんて変なヤツだと思うでしょう。…でも。それでも私はそれが好きで、焼却炉に行くのを楽しみにしていたのです」

「あ……ごめんなんだぞ…」

「見れなかったのだ」

代わりに、ライターの炎を見てました。焼却炉と違って小さいので、長い時間、ずっと。

「毎晩、毎晩」

ライターのオイルが切れました。

あなたのつまらない自己満足のための偽善のせいで。

天吏は悲壮な表情で謝っている。どうして彼がそんな顔をするのか。それもやはり心から反省しているという、主張をしたいだけなのか。

そんな彼に、私は一方的に言う。

「そもそも、私に構うのだって、どうせ生徒会だからなのでしょう」

「もう、いいですよ」「…そんなのは、」

「そんなのは…友達じゃありません」

天吏は絞り出すように言った。

「菊は…本当に―」

そんなことを思っているのか、とでも言いたいのだろう。頷けばなぜ、と来るのだろう。それを容易に想像できた私は、天吏に続きを言わず「あなたが嫌いだからですよ」と言った。

「嘘だろう…？」

何かにすぎるように、そう彼が小さく呟いたのを、私は聞いた。

どうしてか、胃が焼け付くような感覚がする。飲み込むはずのものは出てしまって、腹には何も溜まらなかったはずなのに。

…そう、全てが嘘なら、ほんとに、良かったのにね。

眠れない夜。形だけ布団に潜り込んで瞼を閉じる。エーテルの匂いが、まだ微かにする。何日前か、火が付けばそれで良いと思って取り出した時に、零したものだ。

実に、冷たい匂いだ。

よく沁みる、匂いだ。

あの冷たい感覚が、手に蘇る…。

あの後私は、謝り続ける天吏の右手から、ゴミ袋を乱暴に奪い取り、早足でそこを去った。「ついて来ないでくださいよ」振り返らずにそう言いおいて。

焼却炉にゴミを投げ入れて、いつものようにその炎に見とれた。しかし、いつものように無心にはなれなかった。

…私は、なんてことをしてしまったのだろう。

全部全部、壊れてしまった。天吏との関係…つまり、私にとっては、学校での生活が。

私はあんなに彼を嫌っていたというのに、一方で彼に、頼りきった生活をしていたのだ。

炎は、揺らめく。ゴミを、溶かすように、燃やし尽くす炎。いつそ私も溶かしてほしい。苦しみも間違いも後悔も。

身を焦がすには小さすぎるこの炎に―それでも私は確かに、焦がれたのだ。

「焼却炉、日本が行けよ、日本はゴミとか好きなんだろ」

「掃除大好きだもんな！ひとりで掃除とかしちやってさ」

「そんなに先生に気に入られたいかよ」

「ちげーよ、あれだ。掃除好きなのは友達のカミに会ったためだよ」

「そっかー！じゃあしょうがないな！」　でもそれ焼却炉に捨てん

だろ？友達殺してんじゃん！、ほんとだ！さいてー！

教室に響く笑い声。取り残されるカミと私。その日から私は『ひとりで焼却炉にゴミを捨てに行く役』にされた。

きっかけは、なんだったか。とりあえずこの掃除の件は、特に理不尽だった。私ひとりで掃除をやれと、ほうきを押し付けたのは彼らの方だし、仕方なく誰もいない教室でほうきを動かしていたところに先生が通りかかったのは、ただの偶然以外の何者でもない。

それなのに――

これが、本当の話。

私が手を挙げようが挙げまいが、じゃんけんなんて始まらないし、他に誰かがするとも言わない。ゴミ捨てる役は、あの頃から必ず私で、不登校を挟んだ後も、それは暗黙の了解としてまだ存在していた。

つまり、何も変わってはいない。

あの頃から友達なんていなくて、周囲の人たちは私に嫌がらせをするか避けるかしかしくて、そして今でも私の周囲には、誰もいない。

それまでクラスが一緒になったことがなく、今年はじめて知った天吏。あからさまなイジメを受けていた私に構おうとする理由は、彼が生徒会の人間である以外に何もないだろう。

それでもはじめの頃は、ほんのり嬉しさすら感じていた。でも、彼と過ごす内に気付いたのだ。

天吏のそばには、きつともつと人がいたに違いない、と。

彼をよく観察してみれば、私のそばにいない時は、天吏は色んな人と会話している。ところが私のそばにいる時は、私はおるか、天吏にさえ、誰も話しかけないのである。

それなのに彼は、隙あらば私の隣にやってくる。

そんなのは、ひとりぼっちで可哀想な私の味方をする、いや、してあげること、ただ自己満足したいだけの偽善者でしかない。おそらく、本人は気付いていないだろうけれど。

しかし、ただの偽善でも、私はそのために天吏が嫌われることに何も感じない程冷徹にはなりきれなくて、だからささやかながら拒絶してきた。私からは何も言わないし頼らない。可能な限り誘いは断る…。

―私に構わないでほしかった。

私のせいで、天吏が嫌われるようなことにはなつてほしくなかった。

私がそう思っていることもつゆ知らず、私に関わろうとする天吏を、私はいつしか嫌悪するようになったのだ。

目が覚めた。直後に見た時計はまだ午前二時を示していた。私が眠っていたのはほんのつかの間だったのだ。

そうだと、全身を覆う汗の気持ち悪さを思い出す。そもそこの寝苦しさに起きたのだった。布団からのろのろと這い出る。そこで春の夜の空気の冷たさに身震いする。

…天吏の首を絞める夢を見た。光の溢れる昼下がり、人前で堂々と。彼の喉が跳ねるのを、

―泣き出しそうな目で見ていた。

体の震えが止まらなかった。これはきつと汗と空気の冷たさとは違う理由からのもの。なんて夢だろう？ いや、それよりも、なんてことだろう？

私の中に渦巻く感情。彼を殺そうとした怖ろしさと申し訳なさ、そして、

ざまあみろ、と。

―それって、友達殺してんじゃない！

私は。

ああ、私は。

がちがちと歯が鳴った。震えが強まる。寒い―冷たい。

焼却炉なんてものでなく。そう―核融合炉に、飛び込んでみたい。と思う。あの真つ青な光に包まれて、綺麗だ、と息をのむのだ。次の瞬間には、息をする口も体も何もかもが焼けて溶けて。―そうすれば、全てが許されるような、
―そんな気がして。

朝になつても、寒気は止まらず、体は重くて動かなかった。やつとの思いで寢床に戻り、布団にくるまっても、震えは止まらない。こんな状態でもなお、眠れない自分に嫌気がさした。

ベランダの向こうにある階段を、誰かがのぼる音が聞こえる。気付くと陰りだした空の色が、窓ガラスに、部屋に落ちていた。眠っていた訳ではないが、随分長い時間ぼんやりと過ごしていたようだ。

このアパートの二階には私しか住んでいない。とすれば、誰が階段をのぼったのだろうか、ふと思う。ベランダから見える階段に目をやったものの、既にのぼり終えていたようで、誰もいなかった。と、その時に、安っぽいインターホンの音が鳴った。間をおいて、もう一度鳴り、その音と同時に「菊ー！！？」という、近所迷惑も甚だしい大声が聞こえた。…天吏だ。

今朝よりひどくだるい気がする。それでも玄関に向かうつもりで、無理矢理体を起こした。そこで。

きつと彼を殺そうとした私を殺しにきたんだ。ふいにそんな考えが浮かんだ。そんな訳がない、彼が私の夢のことを知っているはずがない、と自分に言い聞かせたというのに、小刻みになっていた震えが、また振り返してきた。

がちやり、と、ドアの開く音。そして声。

「菊！生きてるかいい！？」

ひよい、と玄関から顔を出した天吏は、私の姿を確認すると顔を緩めた。

「あ…よかった、生きてたんだぞ。…って、どうしたんだい！？すごい震えてるよ！」

「…何をしにきたのですか」

私は冷たく言い放った。彼のその、安堵したような顔も、嘘臭く感じられる。―そして、さっきの考えからくる虚勢。

「何…って、だって君、無断欠席しただろう。何度も電話したのに出ないから、」

その言葉に枕元の携帯に目をやると、ぴかぴかと光が点滅していた。

「心配したんだぞ」

空々しい、と思った。そもそも、昨日あんなことを言われた上で、どうして私を心配できるのだ。

「熱があるんじゃないかい？」

「さあ」

「何か食べたかい？」

「何も」

「…どうして連絡してくれなかったのさ」

そうは言ったものの、彼は私の返事を期待してはいないようだった。

しばらくして天吏は突然立ち上がり、私の脇のベランダのそばに立つと、「空気がこもってるから、あけるんだぞ」と言っただけで私の返事を待たずにそこを開放した。そして彼はそのまま、台所の方へ向かう。「何か作るんだぞ、何なら食べられるかい？」。

なんと偽善的だろうか。昨日の事を考えて、今日彼がこうしているのは生徒会の関係であるのだろうか。そんなことなら、もう帰ればいいのに。

聞いておきながら、やはり私の返事も聞かずに勝手に冷蔵庫を開けた天吏は、なぜか絶句した。

「…！菊！」

「なんですか」

「君、ちゃんとご飯食べてる!？」

「…たまに」 そういえば今、冷蔵庫には、お茶しか入っていないはずだ。気付けば何も食べずに一日が過ぎていた。そんな日々を送っていた。

天吏は私の答えに顔を青くして、そして―つらそうな顔をしていた。

「ちゃんと食べなきゃ…駄目なんだぞ」

彼の声は震えていた。そして、何か食べ物を作るのはあきらめたのか、こちらに歩み寄りながら、

「なにか、してほしいこと…あるかい？」
と言う。

「ありません」

即答。もう早く天吏に帰ってほしい、それだけだった。そしてとても眠りたかった。天吏がいろいろがいがまいが、またどれだけそう願おうが、やっぱり眠れないのだろうけれど。

ああ、そうだ。私は「…いえ、ひとつだけ」と言った。

「私、もう長いこと、眠れないでいるんです」

だから、眠らせてください。

無理なことなのを、承知の上で、私は意地悪く言った。

天吏は私の前に膝立ちをして、私の顔を覗き込むようにした。私は彼から目を逸らし、ベランダから外の景色を見る。すっかり赤くなった空が、ふいに、拡散するような感覚に襲われる。

「…眠れないって、不眠症？」

「さあ」

「…今日も寝てないのかい？」

「まあ、そうですね。…ああ、いや、今日の深夜、少しだけ眠りました。実に久しぶりでした」

それでああなたの首を絞める夢を見ました。

何も考えないままに、その言葉はさらりと口をついていた。言
つてすぐに、その言葉で、昨日既に壊したものを、更に上乗せして
むちゃくちゃにしてしまったことに気付く。案の定、一瞬ぽかんと
口を開けて固まった天吏は、私の言葉の意味を理解すると目に見え
て動揺しだした。私の言葉は間違いなく彼に届いてしまったのだ。
―けれど。…もう、どうだっていい。そう思った。

私の手が、自然と天吏の首へと伸びていた。彼は、抵抗しなかつ
た。

「…あなたの首を絞める夢を見えています」

私はいつの間にか夢を見ている。どうして、どうしてまた、彼の
首を絞める夢なのだろう？

天吏の目が、私の目を射止めて離さない。私はゆるゆると首を振
る。

「嫌です」

「あなたがつきまといてくるのが」「あなたが私を助けようとする
のが」「あなたの偽善が」

「…あなたの善意を偽善としか受け取れない私が」

「嫌なんですよ」

「例え夢でも、あなたを殺すのは」

何度もあなたを殺さずにいられない私が。

「夢じゃないんだぞ、菊」

と、天吏は、自らの首にかかっていた私の手をのけた。…あんな
に、強く思っていたのに、私の手にはるくに力が入らなかったから、
彼は簡単にそうすることができた。

私は、はっとする。

『夢じゃない』。

天吏はまた、私の目をまっすぐ見つめる。私はまた、とつさに目
を背けた。

まるで泣き腫らした瞳のような陽。世界の全ては今、泣き疲れた
赤に染まっている。窓ガラスも、畳も、天吏も。

—ほんの少しだけ、現実逃避した。

夕暮れに染まった天吏は、相変わらず私を見ていた。

「…菊」

「ねえ、菊」

「…泣いてるんだぞ」

「え…」

ぽたり、と、布団に水滴が落ちた。それは—紛れもなく、私の目からこぼれ落ちたものだった。

「終わってしまったからでしょうか」

ようやく天吏と目を合わせる。

夢ではなく現実で、私は天吏の首を締めようとしてしまった。私は、一度壊した天吏との関係を、めちやくちゃどころか完膚なきまでに、粉々にしてしまった。私が学校に通ったりしてなんとか生活できていたのは、—彼のおかげだったというのに。

私の世界は終わってしまった。

「天吏さん」

私の首を、締めてください。

そう言うとは彼は静かに頷いて、私の首に手をかけた。ふわりと、春風に揺れるカーテンが視界の端に見えた。

「…ありがとうございます」「それから、ごめんなさい」「あなたは本当に、善意ある人でした」「悪いのは私でした」

「さようなら」

徐々に力が込められていくを感じながら。私の乾いて切れた唇からは泡のような言葉がこぼれていった。

壊れたものも私も苦しみも間違っても後悔も、何もかもが溶けて死

んでしまったその瞬間、
目前は真っ黒に―真っ白になった。

薄暗い部屋にいた。

どうやら深夜のようだ。

時計の秒針の音。

テレビの司会者の声。

そして、そこにいるはずなのに、見えない誰かの笑い声が。

耳の奥で飽和し、反響する。

――耳鳴りがする。

私にしか聞こえない音。

だんだん早く激しくなつて。

私の心を混乱させる。

耳鳴りが。

消えない、止まない…。

――突然静かになった。

全ての音が無くなった。

そして私は悟る。

『今、世界には誰もいない』

今、この世界には、私しかいないと。

真夜中の部屋の広さと静寂が。

やけに私を急かす。私に、消えろと。

ああ胸につつかえて、上手に息ができなくなる。（どうしてこんなに苦しいのだろうか。今まで自ら望んでやまなかったことだというのに）

刹那。

視界が真っ白に染まる。

気付けば私は、核融合炉の前に立っていた。

結局絞首で死んだ私に、もう一度焼け溶けて死ぬチャンスが与えられたのだ。

そう思った。

焼却炉なんて比べものにならないほど大きく、青い炎がゆらゆらゆれて私を手招きしている。

私は、飛び込んだ。

ひやりとした。

「あ、菊」

「……天吏さん……？」

まだぼやけた視界の真ん中に、天吏の顔があった。ひやりとしたのは、彼に額に貼られた冷えピタシートのようなのだ。

ぼんやりしていると、天吏の背後にいた彼の兄、朝也さんに紅茶の入ったコップを手渡された。私はそれを飲みながら、徐々に覚醒していく頭で考える。

どういう事だろう。

私は、核融合炉に飛び込んだはずではなかったか。

それ以前に、私は、天吏に、首を締められたのではなかったか。

―私は、死んだのではなかったのか。

「私は…死んだ…」

「は？」

私が言った言葉に、朝也さんが訝しげな声をあげた。

「天吏さんが私の首を絞めたじゃないですか」

「はあ！？どういことだよ天吏！！？」

「そんな言い方はひどいんだぞ！」

慌てて天吏は手を振って否定する。特に朝也さんに対しては実に嫌そうな顔を向けている。しかし。

「でも…」

「確かに首は絞めたけど、殺してはないよ」

「ちよっ、首は絞めたって、認めるのかよ！！」

「菊が眠りたいって言うから、眠らせただけなんだぞ」

「…は？」

朝也さんは意味が分からないといった様子で、首を傾げる。私にも分からない。

「頸動脈を絞めると眠れるんだぞ！そんなことも知らないのかい眉毛！」

「普通知らねーことを当然みたいに言うなよ！あと眉毛って言うな！」

私たちに説明された天吏の言葉は、本当に彼の口から出たものなのかと思うものだった。頸動脈？眠れる？

更に、首をひねる私をよそに、天吏は朝也さんを振り向く。

「…え、っていうか確か君に教えてもらったと思うんだぞ」

「…ああうん、知ってたけど…教えたっけ…」

目を逸らして、頭を掻く朝也さん。…彼は一体何者なのか。そもそも何故彼はここにいるのか。

私が思案していると、天吏がこちらに向き直った。そしてどこか、改まった様子になる。

「あのさ、菊」

「オレは、菊と友達なんだぞ」　そう言ってあの時のように、私と目を合わせる。

そうだ、確かに私の世界は壊れて―死んだはず。

「…私はそう思っていない」

なのに天吏がそばにいるのはおかしいことで―混乱する中、私は馬鹿みたいになつかうと同じことを言った。

「うん、でも、オレは思ってる。今日オレがここに来たの、どうせ君は生徒会の仕事だからだとか思ってるんだろ？」

そんな仕事は無かったんだぞ、と彼は言う。

「オレは、菊が心配だから、ここに来た。菊はオレの大切な友達だから、ここに来た」

確か君はオレのこういところが偽善的だって言ったかい？そう

言う彼は、少し笑っている。

「オレは、菊には、大切な友達の菊には、笑っていてほしいんだぞ。菊が悲しいと、オレも悲しいんだ」

オレが悲しいから、悲しくならないでほしいと思うのさ。ほら、これは自己満足だけど、偽善ではない。

だから、安心するんだぞ。と、天吏は言った。

「オレは菊の友達なんだぞ」

どうして。―壊してしまったはずのものが、ここにある。それが、信じられなくて。私は、問う。

「…私は、あなたを殺す夢を見てしまったのですよ。あまつさえ、実際に手をかけようとしたのですよ…？」

「君の手には、少しも力が入ってなかったんだぞ。殺す気なんてちつともなかっただろう」

「でも！それでも！首に手をかけたという事実が変わりません！…それに、それだけでなく」

世界に誰もいなくなった夢をみたんですよ。

私は、自分が死ねばいいと思う一方で、みんなが死ねばいいと、そう思っているんですよ。それどころか―私は自分が死ぬ夢は見たことがないんです。

ついさつき見た夢だって、死ぬ直前に目覚めてしまった。…結局私は死にきていかなかった。

「つまり、心底ではみんなが死ねばいいと思っているということになりませんか？」

はじめは勢いづいていた言葉は、最後にはしぼんでいくように、弱々しくなっていた。

「そんな、最低な人間の私を、大切に思えますか？友達と思えますか？」

「俺だって一日に何度となく天吏に殺意を覚えるぞ」

唐突に朝也さんが言った。「H A H A H A！オレは常に君に殺意を抱いてるけどね！」と天吏が軽く返す。

違う。そういう殺意ではない。そう反論しかけた私を、朝也さんは片手をあげて制する。

「分かっている。けど…例えばそうだとってもー問題はな、日本、お前がどうしたいか、つつーことだ」

「君はどうなんだい？ 生きたいのかい？」

天吏が畳みかけるように言う。だから、私は、

「死にたいんですよ」

「オレを殺したいと思って、世界に誰もいなくなればいいと思った。それで、そう思った自分が嫌になって死にたいと思った。…つまり、菊は死にたいから死にたいと思ったんじゃないんじやないかい？」

「死にたいから死にたい…って…意味分かんないですよ」

「だから、菊は、生きたいけど、自分が最低な人間と思ったから、死ななきゃダメだって思ったんじゃないのかい？」

「…だって、私みたいな人間、生きてちゃだめですよ」

「じゃあ、本当は生きたいんだろう？」

生きていいんだぞ、と天吏は言った。

「だって菊が死んだら、オレすつごく悲しくて死んじやうんだぞ」

「なぜですか。私なんかのせいで、死なないでください」

「そんな風に、君は思っただろう。オレだってそうなんだぞ」

オレを殺したいと思ったような、そんな罪悪感で。オレのせいで、死なないでくれよ。

「私は、夜、眠りません」

「だから、そんな私のいる世界の朝は、なにかおかしくて」

「そんな私のいない世界の朝は…今よりずっと」

すばらしくて、全ての歯車がかみ合った、

「きつと、そんな世界なんだと思います」

か細い声で言った。私の最後の足掻きのようなものだと思う。――天吏との関係は、私の世界は、決して壊れていなかったことはもう、分かっていただけれど。

「世界はそんなに、朝也みたいに頭固くて暴力的じゃないんだぞ！」

「俺だつてそこまで心は狭くねーよばかあ！」

「…こんな私を、受け入れてくれるのですね」

世界は簡単には終わらない。その代わり、簡単に壊れたりもしない。

私は、世界に見限られていたのではなく、自分で見限っていたのだ。

「そうだ菊、りんご食べる？」

「紅茶のお代わりはどうだ？」

二人の声を聞きながら、私は心地よい眠気を感じる。―安心したからだろうか。

「いえ…眠いので、寝ます」

「そうか…そうだ、菊」

「なんですか？」

「次は一緒に、焼却炉に行くんだぞ」

私は頷きかけて、少し考える。

「…いえ、焼却炉はもういいです」

そんなのはじゃんけんに負けた誰かに任せましょう。

「その代わり、放課後一緒に出かけましょう。何か見せていただけるのでしょうか？」

いくつかの話を思い出しながら答えた。

「oh!そうしよう！」

天吏の返事を聞きながら。

おやすみなさい、と私は言った。

「おやすみ」

と答えた声が、まどろみのさなかに、確かに聞こえた。

あとがき

炉心融解の歌詞を完全に覚えました。小説を書く前より少しレベルアップした亜倉です。

歌詞を拾ってるだけとか言いつつ、それさえちゃんとできてないうえ、元の歌詞の時系列が前後していて申し訳ない仕上がりですが、読んでいただけで嬉しいです。

なんだか色々うまくできなくて大いに反省しておりますが、楽しかったので後悔はしていません。

以下文章力の無さが生んだ疑問点の解説

・『「……いや、四色ボールペンのインクを差し替えたからかも」』

四色ボールペンの、ペン先を出す為に押す場所であると同時に色を示す役割も併せ持つあのプラスチックの部分と、インクの部分を分解できる事はご存じだろうか(↑)。そして表示の色とインクの色をあべこべにすることが可能なのはご存じry…

私はそれをやってなんやかんやで新品のマイボールペン1本をダメにした事があります(↑)

普通にすれば壊れませんが、イタズラされた方はいい迷惑なのでまねしないでね！

・『エーテルの匂い…火が付けばそれで良いと思って』

このエーテルはエーテル麻酔でも実在しない仮想の物質でもなく、エチルエーテル、の原料のエチルアルコール、つまりエタノールを指します。消毒液です。

主人公はこれに火を点けようとしたようですが、そんな事したら

間違はなく火事になると思われます。これはいい子もわるい子もまねしないだね！主人公も零した時にその事に気付いて未遂に終わっている感じです。

・『がちやり、と、ドアの開く音』

鍵は？なポイントです。

深い意味や理由はなく、単純に、動揺して帰ってきた主人公がかわすれた、と考えていただければいいかと。

・いつの間にか桐須朝也がいる。

食べ物やら冷えピタシートやらを買いに行こうにも、鍵の問題で主人公の家を出られなかった桐須天吏が、自分の代わりに彼をパシった結果かと思われます（↑）。

ちなみに主人公が目覚めたのは19時とかそのへん。真夜中、はあくまで夢です。

・『「頸動脈を絞めると眠れるんだぞ！」

』

正確には一時的に意識をなくします。しばらく血流を止めることでどうのこうのだそうで（↑）。格闘技でもこういった技があり、これで脳に障害が残ったりする事はありません。でも犯罪になりかねないからまねしないでね！

解説は以上です。感想などいただけると嬉しいです。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6633w/>

炉心融解

2011年10月5日03時17分発行